

ことばの学び

KOTOBA NO MANABI



特集・問うチカラ

ことばをつなぎ、思考を深める発問づくり
教 師の役割として、「問う」とこと自体が日常化している現在こそ、何を「問うべきか」を問うこと自体が求められているように思われる。しかしながら、元来、「問う」とはいかなる行為なのだろう。教師としてではなく、人の人間としての「問う」營みは、「わからない」からこそ生じる行為であると言えよう。

岡山大学大学院 教育学研究科 宮本浩治

授業を参観した。教材は投げ込み教材、「ホタルの里づくり」(大場信義、『現代の国語』H18版所収)を扱った実践。教師が題名を板書し、通

読をさせようとしたとき、人の学習者がつぶやいた。「なぜ『里づくり』なんださう?」「なぜ、このつぶやきを取り上げ、師はこのつぶやきを明確に説いてみたと問う。学習者は「ホタルはきれいな川にしかいないはずなのに『つく』っておかしくてどうなつづいてる」と問う。」師はこのつぶやきを明確に説いてみたと問う。学習者は「ホタルはきれいな川にしかいないはずなのに『つく』っておかしくてどうなつづいてる」と問う。」

ふしたに・かなこ 鹿児島大学医学部卒業。大阪赤十字病院などで内科医として研鑽後、Acupuncture & Integrative Medicine College, Berkeleyで漢方と鍼灸を学ぶ。趣味は落語。観るのも演るのも。

<http://fushitaniclinic.com>

GUEST COLUMN

問うことは信頼の橋を架けること

話す、向き合う、一緒に治す。
ふしたにクリニック

院長・伏谷 加奈子

こんにちは、今日はどうしました? —— 病気を診断するために、医者はまず患者さんに質問をする。この質問にはやり方がある。医学部の「医療面接」という授業で、「診断にいたる必要事項の体系的な質問方法」を学び、卒後研修では指導医の先生に現場で鍛えられる。患者さんから情報を手際よく聞き出せるようになって、やっと医者として半人前。医者の仕事は質問の技術が基本中の基本なのだ。

ところが、患者さんに多く接していくうちに「あれ、おかしいな」と感じることが増えた。ガイドライン通りに診断・治療をしても、患者さんがなんとなく納得していない。薬が効いて症状も改善しているはずなのに、治っていないという。私の持つ医学のものさしで測ると「治っている」ことも、患者さんのものさしで測るとそうではないらしい。人が治るということはどうも、正しいとされる医療を受けることではなく、その人がそうありたい状態に近づくことのようだ。そして、その状態は人それぞれまったく違う。一人ひとりのそうありたい状態を探るのは、体系立てられた医療面接の「質問」ではなくて、その人に投げかける「問い合わせ」だ。

医者は患者さんに問い合わせを投げかけるだけの人なのかもしれない。そうならば、「その人にとっての問い合わせ」をずっと投げ続けていきたい。

ふしたに・かなこ 鹿児島大学医学部卒業。大阪赤十字病院などで内科医として研鑽後、Acupuncture & Integrative Medicine College, Berkeleyで漢方と鍼灸を学ぶ。趣味は落語。観るのも演るのも。

<http://fushitaniclinic.com>

「どんな症状ですか」「症状はいつから

ことばの学び
KOTOBA NO MANABI

特集 ○ 問うチカラ
2014年6月15日発行
(編集・発行人)北口 克彦
(発行所)株式会社三省堂
〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14
電話 03(3230)9446(編集) / 9551(営業)
(WEBサイト)<http://tb.sanseido.co.jp/>

始まりましたか」といった、答えやすい質問からはじめて、今まで考えてみたことのない自分がまだ答えを知らないことを問う。言いよどんだり、すぐに答えられなかったり、答えることをためらってしまう間に、その人を知る糸口となるものがあるからだ。

*

やっかいなのは、どんな問い合わせその人に機能するのかは事前にわからないし、機能しているかどうかは、問い合わせを前にした患者さんの微細な変化を感じ取るしかないことだ。答えた内容よりも、答えるまでの間や表情に、より注意を払わないといけないことが多い。問い合わせを投げて、相手の反応を受け止めて、反応に合わせた問い合わせをまた投げる。相手を知ろうと問い合わせをしたときに信頼の橋がかかる。その橋をお互いが行き来することで、治療のゴールが見えてくる。ゴールに向かうために何をするのかを、患者さんが自分で決めて行動することが「その人が治る」こと。医者が患者さんにできるのは、それを手助けすることだけなのだ。

*

医者は患者さんに問い合わせを投げかけるだけの人なのかもしれない。そうならば、「その人にとっての問い合わせ」をずっと投げ続けていきたい。

ふしたに・かなこ 鹿児島大学医学部卒業。大阪赤十字病院などで内科医として研鑽後、Acupuncture & Integrative Medicine College, Berkeleyで漢方と鍼灸を学ぶ。趣味は落語。観るのも演るのも。

<http://fushitaniclinic.com>

「どんな症状ですか」「症状はいつから

質問の達人になろう

— 質問のタイプを考える —



約30分

- 3~4人程度のグループでチームを編成する。
- チームで答えにする「くだもの」を1つ決める。
- 各チームから1人、「質問をうける人」を決める。

* 答えはクラスのだいたいの人が知っているものにする。
※くだもの他に、動物、スポーツ、世界の国などというようにチームやゲームごとにジャンルに変化をもたせるとよい。

1. 「質問するチーム」は「質問をうける人」に対して、順番に1人1つの質問をして、答えを引き出す。
2. ゲームの終了は、「それは○○○ですか?」「はい、○○○です」となる。

〈ルール〉
なるべく少ない質問の回数で正解にたどりつけたチームが勝ち。「質問をうける人」は、なるべく正解に近づかないように答えるが、うそをつくのは反則。「わかりません」という答えはゲーム中に一度だけしか使えない。質問で選択肢をあける際は2つまでとする。



ゲームによって出された質問について、どのような質問が多かったかを振り返って、質問をいくつかのタイプに分類・分析してみる。

〈例〉
答えが「はい」「いいえ」で答えられる質問／選択肢型の質問／大きな枠をまず確かめる質問／前の質問に重ねる質問／前の質問とはまったく切り口を変えた質問など。

このアクティビティをとおして、質問にもさまざまな種類があり、引き出したい答えや場に応じて、質問の種類を使い分けることを知ることがゴールです。

全国美術館 博物館巡り

02 | 静岡県

沼津港深海水族館
シーラカンス・ミュージアム
(沼津市)

水深2500m、湾として日本一の深さを誇る駿河湾。湾に面する沼津港の一角に開館した沼津港深海水族館では、地の利を生かして採集した“深海のUFO”と呼ばれるメンダコなど他の、今人気のダイオウグソクムシなどの世界の深海生物を見る事ができます。2階に行くと、世界で唯一の冷凍保存された堂々たるシーラカンスが出迎えてくれます。

「なぜ?」「どうして?」——見たこともないヘンテコな形、ちょっと怖いけれどカワイイ姿、何億年も前の恐竜のような姿など、生命と進化の謎を秘めた深海の生き物たちを目の前にしてたくさん問い合わせ取り巻かれます。



アクセス

JR東海道線沼津駅南口より
バス約15分「沼津港」下車
〒410-0845
静岡県沼津市千本港町83番地
055(954)0606
www.numazu-deepsea.com



孔子

紀元前552-紀元前479
(中国／思想家)

子曰不曰如之何如之何者
吾末如之何也已矣

論語 衛篇

子曰く、之を如何せん、之を如何せんと曰わざる者は、
吾之を如何ともすること末きのみ。

(大意)先生はいわれた。「『どうしたらよいか』と疑問を抱くことなく、問題を定義することもなく、よりよい問題解決を目指そうともしないような人に対しては、私もどうしたらよいかわからない。」

孔子は「問い合わせ」をもつことを、よりよく生きようとする者にとっては不可欠なものとして捉えていたのである。

BOOK GUIDE

生徒の学習や思考を制御・活性化する質問力(『発問上達法』)や、企業や世界の教育における問い合わせを中心とした思考法・コミュニケーションをめぐる対談(『対話流』)など、「問い合わせ」の力の真髄をめぐる書籍を紹介いたします。



01 対話流— 未来を生みだす コミュニケーション

清宮普美代・北川達夫 三省堂 2009
四六判 / 224ページ 1,500円+税
ISBN978-4-385-36437-7

否定による攻撃ではなく、質問による納得。互いの違いを受け入れ楽しむ——学び合い協働する組織・クラスに必要なのは、「対話」「相談」の力。OECD・PISA読解力調査専門委員、外交官の経験を生かしてグローバル言語教育を国内外で実践する北川達夫氏と、組織開発メソッド「質問会議」によって、キリンビル、バナソニック等多くの企業において対話思考・対話型コミュニケーションの場を創出する組織開発デザイナー・コーチの清宮普美代氏による、現代社会・現代教育における「生きる力」の本質に迫る対談本です。

ANSWER

もともと、ラテン語で「質問」という意味をもつquestionの最初の「o」と最後の「o」を縦に重ねて合わせた記号であるとする説があります。

日本では明治三十九(一九〇六年)の奏を骨子として、昭和二(一九四六)年三月に文部省が作成した「くぎり符号の使ひ方」(句読法)(奏)に次のように示されています。

「文脈をあきらかにして文の読みを正しくかつ容易ならしめようとするためのものとされていましたがわかります。」

「一、疑問符は原則として普通の文には用ひない。たゞし必要に応じて疑問の口調を示す場合に用ひる。二、質問や反問の言葉調子の時に用ひる。三、漫画などで無言で疑問の意を表すとき。」

「一、疑問符は原則として普通の文には用ひない。たゞし必要に応じて疑問の口調を示す場合に用ひる。二、質問や反問の言葉調子の時に用ひる。三、漫画などで無言で疑問の意を表すとき。」

Q & QUESTION
「?」っていつからあるの?

元外交官 日本教育大学院大学 北川達夫

特集 ♦ 「問うチカラ」

“問い合わせ立てる”ことを習慣化する

T O P I C

最 先端技術を駆使したロボットの開発者から聞いた話である。ロボットを見た子どもたちの反応には、大きくわけて二通りあるという。一つは、「すごい。なぜロボットにそんなことができるんだろう」という反応。もう一つは「コンピューターが入っているんだから当然だよ」という反応。企業として採用したいのは、前者の反応をする人物であるという。なぜなら、未知のことにふれて、それに驚き、「なぜ?」と疑問を抱き、自ら探求するようであれば、人材として成長する見込みがないからだ。

未知のことにふれ、その不思議さに驚く感性を「センス・オブ・ワンダー」という。

アメリカの海洋生物学者レイチェル・カーソンは、センス・オブ・ワンダーこそ、自ら学ぶ姿勢を作るものであり、学びの基礎であるとしている。

グローバル化する社会においては、多様な人々との間にコミュニケーションを成立させ、人間関係を構築していく必要がある。その場合も、センス・オブ・ワンダーは重要である。信念や価値観の異なる相手の主張を聞くと、往々にして「それは絶対に間違っている」と受け止めがちだ。だが、そういう反応から鬭争は生まれても、理解や協働は生まれない。

だから、まずは無理をしてでも「ほう、そういう考え方もあるのか!」と驚きをもって受け止める。理解できないことについては「それはどういうことか?」、納得できないことについては「なぜそういうのか?」と

問い合わせ立てる。このように問い合わせ立てるることを習慣化することで、どのような相手の、どのような主張に対してもコミュニケーションを成立させ、最低限の人間関係を維持することができる。

この一連の反応は、批判的思考の基本でもある。一般に批判的思考というと、相手の揚げ足をとったり、非妥協的に攻撃したりする、欧米的発想というイメージがあるようだ。日本人の謙譲の美德にはそぐわないという人もいる。だが、本来、批判的思考は、きわめて謙虚な思考態度である。なぜなら、「批判」を最初に向けるべき対象は自分自身だからだ。

感情的に受け入れがたい主張に対して、最初に批判を向けるべき対象は、主張する相手ではなく、それを受け入れられない自分なのである。たとえば、

「なぜ自分は感情的に反発するのか?」と、自分に対して問い合わせ立てるのだ。自分と相手とは、価値観(何が大切か)や信念(何が正しいか)が同じとは限らない。同じ知識や経験を共有しているとは限らない。そもそも同じことばと同じ意味で使っているとは限らない。たとえば「あなたは『実験が成功した』というが(なぜか私にはそうは思えない。だから教えてほしいのですが)、あなたは何をもって『成功』というのか?」と問い合わせ立てなければ、自分と相手との溝は深まるばかりなのである。

未知のことにふれ驚き、「なぜ?」と問い合わせ立てる、自ら探求する——これは学びの基礎であり、批判的思考の基本であると同時に、グローバル化する社会を生き抜くための基本技能でもあるのだ。

02 シリーズ 教育技術セミナー2 『発問上達法』

著者は科学的「読み」の授業研究会の創立者。増刷を重ねて21刷に至る(2014年5月現在)。事例をふまえつつ、「教材研究」と「説明」「発問」「指示」「助言」などの相互関係が構造的に解かれています。発問や指示の要点は「セオリー」として提示されますが、いわゆる「ハウツー」ものとはひと味違う個性的な内容・構成・文体で、著者の思いがじみ出る1冊です。